

金蓮壽  
說全集

一

金達壽小説全集 三

筑摩書房

金達寿小説全集三

一九八〇年十月二十五日第一刷発行

著者 金達寿

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町三十八

電話 (営業) 元一七五三 (編集) 二六二六

振替 東京六—四二三

印刷所 三松堂

製本所 鈴木製本所

装幀者 田村義也

金達壽小說全集

第三卷



### 第三卷 目 次

|         |     |
|---------|-----|
| 一九六三年一月 | 7   |
| ソウルの邂逅  | 20  |
| 慰霊祭     | 41  |
| 肩書きのない男 | 54  |
| 公僕異聞    | 65  |
| 苗代川     | 136 |
| 高麗青磁    | 159 |
| ある邂逅    | 175 |
| 対馬まで    | 187 |
| 落照      | 217 |
| 備忘録     | 306 |

解題……………367

へ著者うしろがき〉わが文学と生活(出入党と分裂の波の中で)……………373

短編小説

Ⅲ



## 一九六三年一月

一月一日

午前八時ごろ目をさます。へあ、とうとう一九六三年か——と思う。それにつれていろいろなことを考えると  
いうこと、これもまた例年とおなじである。

しずかな日で、配達された年賀状を見たり、また、こちらからのそれを書いたりしているうちに、いつの間にか一日が暮れて行く。〈今年は〉と思っていたが、しかしまごまごしているうちに、印刷のできてきたのが前日で、今年もまた、こちらの年賀状は「返事を書く」というかたちとなってしまったのである。こうなるともう、年賀状というものもひどくめんどうなものだ。

これまた例年のことではあるが、今年は大いに勉強をしなくてはならぬというので、夕方から机に向かい、中田薫『古代日韓交渉史断片考』を読みだす。「密航者」の資料としてまえからさがしていたもので、前年の暮れやっと、代々木の古本屋で見つけて買っておいだものだ。

著者は八十をすぎた老法制史研究者であるが、その知識の該博なのにおどろく。朝鮮語も知っている。おもしろい。とうとう夜を徹してしまい、二日朝に至って読了。

目がさえてねつかれず、関連本である金沢庄三郎『日鮮同祖論』をとりだして読んでいるうち、眠る。

一月二日

午後二時ごろ目をさます。洗顔をしたところへ、金君たちそろってやってくる。つづいて中野の朴君などもきて、新年宴会、となる。

夜、早目にみんな帰って行き、『日鮮同祖論』を少し読み、すぐねる。

一月三日

朝、永井潔、新聞を届けかたがた、立ち寄る。ビール少し飲む。どちらからともなく、いわゆる「中ソ論争」について話す。永井君帰り、『日鮮同祖論』を読了。

これはまえにも一度読んだものであったが、中田薫『古

代日韓交渉史断片考』とあわせて、なかなかおもしろかった。過去に悪用されたことがあるので、前者のこととなると目をむくものがあるが、しかしこれは冷静に一つの「学問」としてみるべきものであって、そのような悪用の産物としてのみ見るべきではない。

そしてこれはあらゆる著書についていえることであるが、われわれはそこからよいものとはとり、悪いものはすて去ればよいのである。問題は、その読み方である。

つづいて、土田杏村全集第十三巻『上代歌謡』を読む。

『万葉集』の源流を、朝鮮・新羅歌謡の「郷歌」にもとめた研究で、この本のこととはかなりまえに許南麒から聞いていたものであったが、思っていた以上にもしろい。ついにまた夜を徹してしまい、四日朝に至って読了。

一月四日

きょうは旧十二月九日、祖母の祭祀日である。本当はこの祭祀も兄の家（本家）でとりおこなうべきものであるが、特に祖母のこれだけは、こちらへワケてもらっているのがある。

午後、新宿へ出て北林谷栄と会い、鳩バスなるものに乗る。京都その他では観光バスに乗ったことがあるが、東京のそれはまだなかったもので、北林さんの仕事のための「研究」のことがなくとも、いつか一度カンコウしてみたいと

思っていたものだ。「お江戸めぐりコース」というのだったが、なかなかウマイ工合いにできていた。しかし、これは一度でたくさん。

九時すぎ家へ帰り、かたちばかりの祖母の祭祀をとりおこなう。子どものころはこれもきびしくやかましかったものであるが、いまはもう、その作法もほとんど忘れてしまっている。自己流でウヤマヤにします。

これがむかしなら家門から追放されかねないところであるが、しかし祖母は、それも許してくれると思う。なにかもを許してくれた祖母。そしてまた、なにかもを、そうして許さなくてはならなかった祖母。深夜ひとり祭祀の酒を飲みながら、その祖母のことを思っ涙ぐむ。それを家内に見られるのがてれくさくて、妙な表情をする。――

一月五日

『現実と文学』三月号の締め切りが近づいている。「密航者」を書きださなくてはならない。やっとさいごの章にさしかかったもので、出版社には一月末までに全部まとめてわたす約束をしているが、それはむづかしいとしても、とにかく書きださなくてはならない。頭が重い。

「密航者」書きだせないまま、何となく、松本清張『幕末の動乱』を読みだし、また夜を徹してしまう。これは河出から出た「現代の日本史」のうちの一卷であるが、松本清

張という作家の思想を知るためには、かっこうのものである。  
る。

一月六日

依然「密航者」書きだせない。この数年つづいていることであるが、小説を書くということがこんなにむづかしくなっているとは、いったいどういうことか。――

上田耕一郎『戦後革命論争史』上巻を読みだす。これを読みだした理由は、はっきりしている。アカハタを含む各新聞に報じられているいわゆる「中ソ論争」に関連し、戦後の日本のそれをここでふりかえってみたかったのである。

一月七日

「密航者」三枚ほど書く。

『戦後革命論争史』読みつづける。すべてこの目で見えたことだし、また、経験もしてきていることなので、読みだしたとなるとやめられない。上巻読了。

一月八日

「密航者」書きつづける。

一月九日

夜、朴三文、張斗植と新宿で会う。朴さんに朝鮮史研究会の「学報」出版のことについて話す。なかなかむづかしい。ボルガからポアソンに至る。

一月十日

フクザツなることを、一日ぼんやり考えてすごす。夜、「密航者」にとりかかるが、進まない。

一月十一日

「密航者」ととりくむ。夜おそく、小原元きて泊まる。

一月十二日

小原帰り、前日におなじ。大阪より、鄭貴文上京。

一月十三日

「密航者」少し進む。――

一月十四日

リアリズム研究会運営委員会。夜五時半からであったが、新年第一回ということもあって、全員出席。若い新しい人をもっと増強することとなり、従来九人であった運営委員会を、一挙に十七人とする。各セクションを再編し、あらたに事業部をつくる。

運営委員会おわり、張斗植といっしょに外で鄭貴文と会い、三人で東京駅まである人を見送る。十時すぎ新宿へとってかえし、ここで三人わかれるべく茜にたむろしていたところ、東大の横山正彦、別のもう一人の教授とあらわれる。

がやがやわやわやと時間をすごし、午前一時すぎとなる。いっしょにきた老教授を帰した横山さん、しきりと自宅新築の二階へきて泊まるようすすめたが、あすの仕事のこと

を考え、みんなとわかれて帰途につく。いまにして思えば、この夜は、横山さんのすすめに応じて泊まればよかったのである。

ひろったタクシーの運転手は、一見五十をすぎたと思われる人で、珍しくことばづかいもていねい、すぐにある好意を持つ。いまある客から一千六十円の料金を乗り逃げされたといっていたが、それも決してウソではなかったと思う。で、エントツにさせてくれないかというので、「ああ、いいよ」と答え、「おれはあんたたちの味方で、会社の味の味方ではない」などという。

一人乗るときはいつもそうするように、例によって私の坐ったところは入り口のドア近くで、運転手の左肩うしろ。右足を左足のうえにかさねて組み、両手をそのうえへのせて、ウトウトしていた。運転手はまだいろいろと話しかけるので、少し「へウルサイなあ」と思ったのをおぼえている。いま思うと、深夜で、車はかなりのスピードをだしていたのだ。

と、何といったらいいか、やはりガチャーンというべきか。私は、「おい、どうした!」と思わず大声で叫んだことだけは知っている。が、運転手は一言も声なし。ドアを押して飛びだしてみると、車は十字路の角の鑑戸に前の半分を突っ込み、その左半分を横の柱に打っつけて、つぶれ

た提灯のようになっている。

運転手は即死したと思ったが、とてもそこへ近寄って行ってみる勇氣が出ない。私は右足首を捻挫し、左手首におなじ痛みをおぼえ、これはあとから知ったけれども、頭に三つ四つコブをつくり、左耳うえのところからは血をだしていたが、とにかく生きている。思わず右手をバアバアと握ってみたのをおぼえている。これをけがしたのでは、仕事ができなかったからである。

右からきて打つかった車も向こうの方でおなじようなことになっていたらしいが、これは、このときは、ほとんど気がつかなかった。すぐに他の車が寄ってきてとまり、人々が集まってきて、うちの何人かが、私の乗っていた車の運転手を引きだした。見ると、彼はまだ生きている。私は駆け寄って行って、

「おい、おじさん、生きていたのか。よかったなあ、よかったなあ」と何度もいう。ひどく、なにか、なつかしさのようなものを感じる。が、運転手は、ぼうとしたような目で私を見ているだけで、依然、一言も声なし。

誰かが一九番へ電話をしてくれたらしく、間もなく救急車がやってきて、運転手はそこへ運び込まれた。誰かが、「おい、向こうの運転手もそれに乗せろ。あれも死にそうになっているぞ」といった。

そこではじめて私は、向こうの車もおなじようなことになっ  
ていているらしいことを知ったのであるが、私は、それは  
もう目をそらして見ないことにした。誰かが私のことにも  
気がついて、

「あんたもけがをしているのでしょうか。いっしょに乗って  
行きなさい」といったが、私はそれにたいしても首を振っ  
た。もう、たくさんである。

救急車の走りだすのを見届けて、私はそこにとまってい  
た他のタクシーに乗りかえて帰った。「命びろいをしまし  
たね」というこの若い運転手に向かって、私は、「あんた  
も気をつけなさいよ。気をつけるよ」と何度もいう。何度  
も何度も、そんなことをいったと思う。

一月十五日

目をさましてみると、休が動かない。大したことはない  
と思ったが、やはり相当なものだったのだ。右足首の捻挫、  
左手首、これはもう全然いけない。頭に手をやってみると、  
あちこちにコブができている。衝突の瞬間、跳ねあげられ  
て、どこかに打つけたのだ。

へおやおや、これはひどい目にあったなあ」とつくづく思  
う。右手は使えるとしても、仕事どころではない。それに  
しても、あの運転手はどうしたろうか、と思ったりする。

ドイツ社会主義統一党大会開かれる。いろいろな意味で、

注目すべき大会である。夜、ねたまま、上田耕一郎『戦後  
革命論争史』下巻を読みだす。

一月十六日

前日ほどではないが、右足首の捻挫、左手首はまだ相当  
にいけない。トイレへ行ってしゃがむときは、依然、妙な  
かつこうとなる。(二月はじめ、いまこれを書いていると  
きもなお少しそうである)

『戦後革命論争史』下巻を読了。全体としてもなかなかお  
もしろかったが、特に第三章「第二〇回大会と八全大会」  
における、中国共産党にたいする著者上田の評価に強い共  
感をおぼえる。「中国共産党の新組織路線」(P一六二)と  
して、こう書かれている。

「個人崇拜の苦い経験や、のちにハンガリー事件のさいに  
ハンガリー勤労者党が一瞬のうちに崩壊した事実などは、  
権力をにぎった共産党の党生活に予想外にたやすく不健全  
な要素が成長しやすいことを示していた。劉少奇報告なら  
びに鄧小平の『党規約改正にかんする報告』は、このよう  
な不健全な要素の成長を防止するうえで、革命勝利後の強  
大な共産党の組織問題について貴重な教示をあたえたもの  
であった。」

新規約は、党生活の民主的機能を拡大し、官僚主義を克  
服し、個人崇拜と縁のない『集団指導』と大衆路線を忠実

に実行するという中国共産党の従来からの方針を、さらに  
いっそうおし進めたものであった。もっとも大きな根本的

な改正は、民主化のために全国大会・省級大会・県級大会  
を常任委員制として、二―三年の任期を定めたことである。

このほか官僚主義をふせぐための大衆路線の強化、指導機  
関の縮少と上級・下級の段階の簡素化、下からの批判の保  
障の強化、党員の義務の厳格化と権利の拡大などがおこな  
われた。『大衆のなかから大衆のなかへ』という『大衆路  
線』がもっている『きわめて深い理論的意義と現実的意  
義』を、『党は人民大衆を自身の道具とするのではなくて、  
意識的に、自分たちこそ人民大衆が特定の歴史的時期に特  
定の歴史的使命を達成するための道具なのだ』と考へ、『党  
には人民大衆を超越するような権力のないこと、党には人  
民大衆にたいしてお恵みをしたり、請負ったり、強制的に  
命令したりする権力のないこと、そして党には人民大衆の  
頭のうえにのさばって王様づらする権利のないことを確  
認』し、大衆の意見を『整理、分析批判および総括』する  
認識方法と指導方法にあるとした鄧小平の報告のなかには、  
中国共産党の『整風運動』のなかから生まれた『党』につ  
いての新しい把握と新しい指導方法とが表現されていた。  
これこそ中国共産党の健全な発展と勝利とを基礎づけたも  
っとも大きな原動力であり、そしてまたスターリン在世当

時のソ同盟共産党ばかりでなく、日本共産党にももっとも  
欠けていたものがこの『大衆路線』ではなかったかと思わ  
れる」

また、この章の注1（P一六三）にはこう書かれている。

「一九五六年四月五日、中国共産党中央委員会政治局拡大  
会議の討議にもとづいて『人民日報』編集部が書いた杜説  
『プロレタリア独裁の歴史的経験について』には、すでに  
中国共産党がスターリンの『中間勢力の孤立に主要打撃の  
方向を向ける』戦略配置の誤りを、一九二七年―三六年の  
国内革命戦争期の苦難の熱火のなかで克服し、『われわれ  
の経験によれば、革命の主要打撃方向はもっとも主要な敵  
に向けてこれを孤立させるべきであって、中間勢力にたい  
しては連合しつつ闘争する政策をとり、少なくとも彼らを  
中立化し、もしできれば、革命の発展に役立てるように、  
かれらが中立的立場から移ってきてわれわれと連合するよ  
うつとめなければならぬ』という正確な戦略配置に到達  
していたこと、また個人崇拜を克服して『大衆路線』とい  
う集団指導の方法を確立していたことをのべている。中国  
共産党のこのゆるぎない確信は、たとえば第二〇回大会の  
とりあつかい方についても、各国共産党の多くが第二〇回  
大会の諸結論から直接にすべての問題を発展させざるをえ  
ない事態におかれたのに反し、八全大会の劉少奇報告は、

それを最後の国際関係の項のなかで、『世界的意義をもつ重大な政治的事件』と評価しつつ、ソ同盟共産党の項でふれるにとどめたことにもあらわれている」

まことに、中国共産党こそは、真のスターリン主義の批判者であつたのだ。きのうまではスターリン主義者だつた連中の「スターリン主義批判」などは、スターリン主義それ自身の裏返しにすぎない。

夜、繃帯をぐるぐる巻きにした足を古靴に押し込み、朝鮮新報の座談会に出席。

一月十七日

たまつていた二月号の諸雑誌を読む。『中央公論』の黒田寿男「なぜ日韓交渉に反対するか」がいい。近くしなければならぬ講演資料として、書き抜きをする。次のくだりである。

「われわれが統一の必要を力説すると、これに対して、善意の人々をも含めて、こういう反論がだされる。近い将来にそれが実現できる見とおしは少ないではないか、と。これに対してわれわれは更に反論したのである。統一の見込みがないとか、むずかしいとかいうが、統一を困難にさせているものは朝鮮民衆の輿論の力であるか、それとも外国の圧力とこれに追隨する国内権力者の弾圧政策であるか。アメリカ政府は、統一をよろこばない。そのかいらい政権

である朴正熙一味は無類の弾圧政策をもって統一を妨げている。こういう勢力が自分で統一を圧殺しながら、統一はむずかしい、むずかしいといっているのである」

いわば常識みたいなようなものであるが、社会党の黒田寿男もこういつている、というところがミソである。しかし、黒田寿男という人は立派な人である。この論文を読んだときは、はがきで一言礼をいおうと思ったが、ちょっと住所がわからなかつたので、そのままとなっている。

『文芸春秋』の川端康成「人間のなか」を読み、へふうん、なるほどね〱と思う。何だか、川端康成という作家が、いつときに全部わかつたような気がする。もうたくさんだ、と思う。

『新日本文学』のアクションノフ「月への道なかば」——ばかばかしいの一言につきる。作品としてはほとんどレベル以下である。この作家はいまソヴェトでもてはやされているそうだが、いまの時期、わかるような気もするが、いずれにしてもこれはつまらん。同誌の上村希美雄「徳永直・『労働者作家』の原像」はなかなかおもしろい。学ぶべきものが多い。あとに予告されている「蔵原惟人論」はどういうことになるかわからないが、これは、その発想のところに問題はあるとしても、われわれには考えさせられるものの一つではないかと思う。

夜、「密航者」にとりかかる。机に向かっていると、右足首の捻挫のところがひどく冷えて、痛む。

一月十八日

アカハタにより、ドイツ社会主義統一党第六回大会における同党ウルブレヒト第二書記の報告「社会主義の綱領とドイツ社会主義統一党の歴史的任務」を読む。

「密航者」書きつづける。進まない。夜、リアリズム研究会『現実と文学』経営部会、電話をして欠席する。

一月十九日

青森県職場演劇サークル協議会より、リンゴ一箱送られてくる。同サークル協議会は近く『朴達の裁判』を上演することになっているので、その原作料(?)のつもりらしい。とすると、これは「朴達リンゴ」というべきか。つづいて手紙もつき、『朴達の裁判』の上演は三月五日にきまったという。「日韓会談」反対運動と結びつけていたいから、当日は、是非きてくれという。が、青森まではとても行けそうにない。

「密航者」ととりくむ。二十一日朝までには、何としても三月号分書き上げなくてはならない。

一月二十日

アカハタにより、ドイツ社会主義統一党第六回大会におけるフルシチョフ連共産党第一書記の「演説」を読む。

つづいて伍修權中国共産党代表団の「演説」を読む。――「密航者」書きつづける。夜に至り、やっと二十五枚となる。もう少し書かなくては、と思うが、疲れてダメ。

何とも情けないことではある。松本清張の一日の仕事の量にも足りないものを、何日もかかってやっと、というわけである。完結までにあと四十枚ばかりをのこすこととなったが、来月の二十日までには、これは何としても書き上げなくてはならない。

一月二十一日

夕方、「密航者」の原稿をリアリズム研究会(『現実と文学』へ届け、同事務所で見はからって、平凡社へ向かう。五時半から、同社の労働組合で話すことになっていたからである。また、講演だ。

今年からは、なるべく雑文とか講演といったものとはわけて作品に専心したいと考えているが、それがいわゆる「日韓会談」ということになる、そうは行かない。むしろこちらからすすんでも出かけて行かなくてはならないことなのだ。

編集者などといった、いわば気心の知れた人たちばかりだったので、わりと楽に、かなり突っ込んだところまで話すことができたと思う。相談があるといって同社まで来た尹学準といっしょに帰る。途中、同労働組合からもった